わたしがつなぐ、越生町

越生町 町勢要覧 2022

わたしがつなぐ、越生町

このまちにはある。
わたしが未来に、残したいもの。
わたしが新たに、育みたいもの。
いま伝え、届けたいこと。
わたしらしく、暮らせる理由。

一万人の花咲いて
時代をつなぐ、わたしがつなぐ。

Contents

【梅】喜びの花が咲く梅の里 ・・・・・・・・・・・・・・ 4
【ゆず】日本の香りを守り伝えてきた ・・・・・・・・・・ 8
【食】いい香り、おもてなし ・・・・・・・・・・・・・・・・10
【里山】自然をつなぐ仕事 自然とつながる暮らし ・・・・12
【福祉】誰もが安心して暮らせるまち ・・・・・・・・・・14
【子育て】のびのびと、あたたかく見守られて育つ ・・・・16
【暮らし】移住＆Uターン わたしたちの生き方 ・・・・・18
【日常】心ときめく、日常がある ・・・・・・・・・・・・・20
【四季】季節を感じるイベントと花ごよみ ・・・・・・・・21
【祈り】風土に根づく 祈りのかたち ・・・・・・・・・・・22
【越生梅林】春の訪れを祝う ・・・・・・・・・・・・・・・24
【黒山三滝】祈り継がれた、聖なる場 ・・・・・・・・・・26
【自然体験】五感で歩く、ハイキングのまち ・・・・・・・28
【アウトドア】自然と過ごす 極上のひととき ・・・・・・30
【文化財】歴史を紡ぐ、文化に触れる ・・・・・・・・・・32
【歴史】これまでの越生町を振り返る ・・・・・・・・・・34
越生町のまちづくり ・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
数字でみる越生町 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38

越生町

町勢要覧 2022

喜びの花が咲く梅の里

越生町と梅の歴史

〝梅の里〟越生と梅の関わりは、南北朝時代（1350年頃）に九州太宰府から天満宮を分祀した際に、菅原道真にちなんで梅を植えたことに始まると伝えられています。

江戸時代には、梅は特産化しており、江戸に生梅や梅を出荷していた記録があります。

明治になると観光地としても注目されるようになり、越辺川岸の一画が園地化され、明治33年（1900）には梅林保勝会が結成されました。多くの文人墨客を魅了するところとなり、明治34年に来遊した歌人で国文学者の佐佐木信綱は〝入間川高麗川こえて都より来しかひありき梅園のさと〟の歌を詠んでいます。

梅園神社（旧小杉天満宮）

越生の梅のはじまりに関わる神社。明治40年（1907）に近隣の神社を合祀し、現在の社号となりました。

田山花袋や野口雨情も訪れ、作品をのこしています。

昭和15年（1940）には、県の名勝に指定されました。

「関東三大梅林」の一つである越生梅林には、樹齢670年を超える「魁雪」や「越生野梅」などの保存古木をはじめ、約1千本の梅が植えられています。開花時期には、町内全域で約2万本もの梅の花が美しく咲き誇ります。

越生のオンリーワン「べに梅」

梅生産者／山口農園代表　山口由美さん

「越生べに梅」とは・・・

- 越生町に古くから受け継がれ栽培されてきた固有の梅
- 果実は、香り高く薄皮で果肉が厚い
- 完熟するとフルーティーな香りで、表面に紅色がさすことから「べに梅」と呼ばれる

日本でここにしかない「越生べに梅」を全国へ

越生町には「べに梅」という在来種があります。べに梅は古くからある品種ですが、保存期間の短さや加工の難しさから、市場に出回ることがほぼないため、一般に名が知られることのない稀少な梅でした。町内でひそかに育まれてきた「べに梅」ですが、近年、6次産業化のための取り組みの一つとして、その在来種としての価値が見直され、ブランド化の動きがはじまりました。

成分分析によると、一般に普及している南高梅などの品種よりクエン酸値が高く、ペクチンが強い＝固まりやすいという特徴が出たため、それを活かしてデザートや和菓子など加工食品の商品化を進めています。青果としては、都内の百貨店で取り扱うようになり、販路も広がっています。生産量の少ない稀少な「べに梅」は、一般品種に比べ高級品として販売されますが、購入していただいた方からは「薄皮でジューシーで、フルーティーな香り」と好評で、リピータも増えています。

越生べに梅の魅力を発信する
山口農園の山口さん

次世代の担い手のために「越生の梅」をブランド化

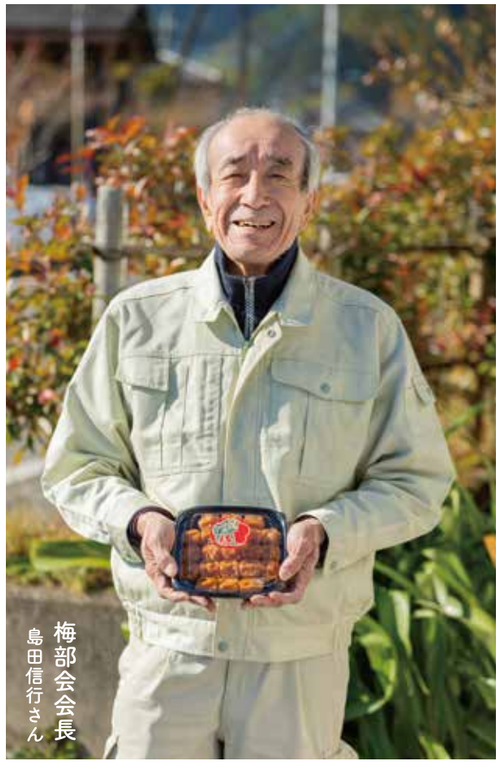
今後も企業とコラボレートするなど、多くの人に知ってもらえる機会を増やしていきます。べに梅のオンリーワンの価値が広まっていくことで、「越生の梅」に関わる、産業全体のブランド化に繋げていきたいと考えています。また、農業における次世代の担い手に、誇りやプライドを感じてもらえるよう特産品を守っていくことが使命だと思っています。

城西大学とのコラボレートにより新しく生まれた
「JOSAIコラーゲンようかん べに梅味」

梅の里
おごせ

農家の手作り、真心込めて

一粒の梅のチカラで人を元気に


梅部会会長
島田信行さん

「品質の良い越生町の梅を多くの消費者に届けたい。品種の食べ比べもオススメです。」と話すのは、ＪＡいるま野越生支店梅部会会長の島田信行さん。

現在、梅部会には86名の生産者が所属しており、梅の販売会や梅干し品評会、栽培方法に関する研修会などの活動を、年間を通じて行っています。

梅干しの品評会では会員が丹精を込めて作った梅干しが出品され、さらに良い商品を作ろうと会員同士で日々、切磋琢磨しています。

栽培している梅の品種は「べに梅」「白加賀」「十郎」「南高」「織姫」。中でも「べに梅」は越生固有の品種で皮が薄く、果肉は厚く、梅干しにするとフルーティーでまろやかな味わいになります。名前の由来は、表面に紅色がさすことから〝べに梅〟と呼ばれます。

越生町の現在の梅の栽培面積は約30ヘクタール、収穫量は約２００トンとなり、農家の高齢化により、全盛期に比べ収穫量は減少しているものの、栽培面積、農家数ともに現在でも県内1位の産地になっています。

「農家の地道な頑張りにより品質が向上してきています。今後、「べに梅」ブランドを全国に広め、魅力ある農業を引継ぐことを目指して、地域活性化に繋げていきたい」と意気込みます。

青梅の出荷時期は6〜7月

生産から販売まで

越生特産物加工研究所では、地場産の農産物を、地域で加工し、販売まで行う「地域ぐるみの6次産業化」を推進するため、新商品の開発、既存商品の研究・改善などを積極的に行っています。

地域の農家と連携し、越生の梅のブランド化に貢献しています。

左から加工研究所職員と梅部会会長・副会長

梅と生きる人々が織りなす

越生と暮らしの梅

梅染のストール。自然の原料を使用し、ひとつずつ手染を行い、販売しています。染の会「宙（そら）」

梅しごとは、季節を楽しむ手仕事の一つです。梅雨の時期、梅の収穫が最盛期を迎える頃、多くの家庭で一斉に梅しごとが始まります。梅酒、梅ジュース、梅干しやジャムなど、それぞれ家庭ごとの味や作り方があり、暮らしの知恵として蓄えられています。

梅のクエン酸で体を健康に保ち、美味しく元気に夏を乗り切る。それは越生の人々が代々育くんできた「梅と生きる」文化です。

近年では、剪定した梅の樹皮から染液を作って行う、梅染めも行われています。長い年月を生き、私たちに恵みをもたらしてくれた梅の木に感謝しながら、その命を無駄なく使うことで、新たな価値へと生まれ変わっていきます。

土の恵みに感謝する、自然との触れ合い

子どもの頃からそばにある

緑の少年団

子どもたちが緑を愛し、緑を守り育てる活動を通じて、ふるさとや人を愛する心豊かな人間に育っていく。これを受け、緑の少年団では、緑化・栽培活動・森林との触れ合い体験活動を行っています。そして勤労、奉仕の精神、自然に対する慈しみの心を持つこどもの育成を目的としています。

地元の食材を使った「ふるさと給食」

緑の少年団の活動のひとつに食育の授業があります。子どもたちが梅を収穫・加工し、食の大切さを学びます。

日本の香りを守り伝えてきた

日本を代表する柑橘類のゆずは、
その香り高さで豊かな日本の食文化を育んできました。
越生では県でトップクラスの栽培面積で
安定した生産体制を保ち、
その香りを後世へとつないでいきます。

ゆず部会会長
宮﨑幸男さん

わたしたちのゆず作り

ＪＡいるま野越生支店ゆず部会の会長として、ご活躍されている宮﨑幸男さん。現在、ゆず部会には48名在籍しており、ゆず販売会やゆず品評会などの活動を行っています。

放っておくとゆずは上へ伸びて行くので収穫が大変になります。剪定を行うことで樹木全体の日当たりが改善され、より高品質なゆずが収穫できるようになります。

ゆず品評会では各農家が育て上げたゆずが一堂に揃います。

埼玉県知事賞をはじめ、多数の賞があり、自慢のゆずの出来を毎年競い合っています。

「ゆずの皮は薬味、実はジャムやジュース、種は化粧水になります。皮・実・種、すべて使えて捨てるところがありません。」とゆずの魅力を話します。

「農家の高齢化が進んでおり脚立の昇り降りも大変ですが、剪定をしっかりと行い、もっと良いゆずを作れたら」と語ってくれました。

ゆずの販売会

毎年12月には、越生のゆずの販売会が行われます。旬のゆずを求め、多くのお客様で賑わいます。会場内は爽やかなゆずの香りで包まれます。

越生町とゆずの歴史

越辺川に沿う山間丘陵地は、秋から冬にかけて北西風のあたることが少ない気流逆転層に覆われていて、降霜日数も少なく温暖な自然環境に恵まれていることから、町内では局所的にゆずが植えられてきました。販売を目的として植え始められたのは大正末期から昭和初期の頃で、昭和12年には、黒山区で植地栽培が始まり、これが現在の「越生ゆず」の起源になっています。

ゆず鍋

ゆずの旨味を余すことなくいただけます。旬ならではの料理です。

越生のゆず

栽培面積県内トップクラスの越生ゆず。香り高く、しっかりした実ぶりが特徴です。

いい香り、おもてなし

人と風土がつながり、長く親しんできた香り。
梅やゆずを多様に活かした、香りをたのしむ
逸品が揃っています。

昔ながらの梅干し「梅農家のみなさん」

無添加梅干し

越生の梅といえば、塩だけで漬けた無添加の梅干し。塩分濃度10〜12%ほどの、伝統の梅干しづくりの製法が引き継がれてきました。果肉がやわらかく、食べやすいことが特徴です。

梅カツ・梅コロッケ

ボリュームたっぷりの揚げ物も、梅の風味でさっぱりと仕上がります。夏バテやハイキングの後の疲労回復にもおすすめです。

梅コロッケ「肉のひろさわ」

梅味噌カツ丼「大衆割烹 岩井屋」

ゆずの皮

爽やかでスッキリとした香りのゆずは、実だけではなく皮も料理に重宝されます。お吸い物やふろふき大根のトッピングなど、様々な場面で香りを添え、鮮やかな彩りは、食欲をそそります。

ひもかわうどん「茜の会」
うめその梅の駅にて冬季限定販売

ひもかわうどん

郷土料理として、家庭でも広く食べられているひもかわうどん。たっぷりの野菜と幅広麺に、爽やかなゆずの香りがマッチ。町内のうどん店ではゆず七味も楽しめます。

水がきれいだからおいしいもの

黒山三滝があり、豊かな水源に恵まれた越生町内では、あらゆる食の分野で越生のおいしい水が使われています。素材本来の良さが引き立つ、ここにしかない美食があります。

厳選した大豆を使用した、こだわりの美味しいお豆腐です。

清冽な水から生まれた地酒は、優しく力強い味わいが特徴です。

「打つ、茹でる、締める」。越生のおいしい水をふんだんに使用したこだわりのうどんや蕎麦が自慢です。

梅ジャム・梅のガレット

完熟梅は砂糖と煮てジャムにすると美味しい。パンやヨーグルトなどと合わせると、甘酸っぱい余韻が口の中に広がります。

梅ジャム「越生特産物加工研究所」

梅のガレット「梅凛caffe」

梅 × スイーツ

酸っぱい酸味が特徴的な梅を、和菓子や洋菓子にアレンジするお店も増えています。砂糖と合わせることで、落ち着いた酸味で食べやすいのが特徴です。新しいスイーツが続々と生まれています。

梅 × ジュース
ゆず × ジュース

梅の収穫の時期になると家庭でもよく作られる梅シロップ。好みの割合で水や炭酸水などで割ると、梅ジュースになります。
ゆずは新鮮な果汁を用いれば爽やかでフレッシュな味わいになります。

梅スカッシュ／柚子スカッシュ「梅凛caffe」

自家製ジュース

飲食店で、梅やゆずを使った自家製ジュースに出会えるのは越生ならでは。味わいや作り方はお店によって様々です。

ゆずタルト・ゆずロール

ゆずを使ったケーキは、軽くさっぱりとした味わい。コーヒーや紅茶と合わせて、香りに癒されます。

ゆずタルト「緑側カフェ tokinoki」

結ロール「オクムサ・マルシェ」

ゆず × スイーツ

ゆずの爽やかな香りを存分に楽しめるのがゆずを使ったスイーツ。越生では昔から、焼き菓子やシャーベットなどのおやつとして愛されてきました。

特産品のおくりもの

地場産の農産物を加工・販売する越生特産物加工研究所では、梅やゆずを贅沢に使用した食品や飲料を開発しています。ご自宅用から贈り物まで、越生の味のお土産にも人気です。

梅・ゆずを贅沢に使用したご当地ジュースや羊羹
左から元気百梅、ゆず之介、おこせうめ娘、
梅ようかん・柚子ようかん

ご当地キャラクター「うめりん」のお土産が人気
上からうめりんあんころ餅、うめりんアイス（かたくりの会）

うめその梅の駅

特産品が揃う梅の駅。農家の手作り梅干しや、採れたて農産物、工芸品なども取り扱っています。

自然をつなぐ仕事
自然とつながる暮らし

7割を山地が占める越生町では、古くから林業が栄え、その恵みをふんだんに取り入れた「自然とつながる暮らし」が営まれてきました。自然は人に道具をもたらし、心を育み、豊かな文化を生みだしていきます。

良質な木材「西川材」

「西川材」とは、飯能市・越生町・毛呂山町・日高市の4市町から産出されている杉・桧の総称をいい、そのルーツは江戸時代までさかのぼります。

江戸大火の後、江戸では木材が不足していました。そこで筏（いかだ）を組んでこれらの地域の川を経て江戸まで大量の木材を送り届けていたことから、江戸の人々が「西の川から送られてくる良質の木材」としてこの地方の木材を「西川材」と呼ぶようになったといわれています。この地域の土壌・気候は杉・桧の生育環境に適しており、色艶がよく木目の詰んだ（＝細かい）年輪、強度のある優良材として評価されています。

越生町は、西川材が地元産材であることに誇りを持ち、西川材の更なる普及に努めます。

木材の伐採・仕入・製材・販売を一貫して行う
有限会社 島田木材

伝統の建具製作の技術による「積み木」

西川材を活用した校舎の木質化

自然が育む感性の手しごと

ちいさな里山でひそかに育まれてきたものとして、芸術や工芸があります。透き通った山の空気、越辺川の流れる音、豊かな自然環境が感性を育み、創作活動へと誘ってくれます。

町内には陶房やギャラリーカフェなど、実際に作品を鑑賞したり、作品づくりを体験できる場も増えています。越生で生まれたこだわりの作品や創造性に触れ、ゆったり流れる時間を過ごすことができます。

陶房ひと葉

越生の伝統「渋団扇（しぶうちわ）」

表面に柿渋を塗って仕上げる「渋団扇」は、越生の代表的な特産品として明治時代に栄えました。明治9年（1876）の『武蔵国郡村誌』には年産42万本、同44年の『埼玉新報』には240万本の製造数に達したとあり、全盛期には50軒ほどが製造に携わっていました。

形は一文字団扇（いちもんじうちわ）と言い、肩骨が真っ直ぐで、柄に対し直交しているため、特有の腰の強さを持ちます。扇いだ時に強い風が起こせるため、鰻屋などで調理の際に愛用される逸品です。現在も伝統を継承する「うちわ工房しまの」では、押し花を入れたうちわや貼り体験を通じて、越生うちわの良さを伝えています。

表面に柿渋を塗って仕上げる渋団扇

誰もが安心して暮らせるまち

越生町全体での地域包括支援

越生町では住み慣れた地域で地域の皆さまが中心となり、その人らしい安心した生活を送ることができるような地域作りを目指しています。

「保健センター」では、町民の皆さまの健康のために、各種健(検)診、予防接種、健康長寿講座などを開催し、積極的な健康づくりに取り組んでいます。

「地域包括支援センター」は高齢者の急速な増加に備え、いきいきと元気に生活できるように、様々な面から総合的で継続的な支援を行っています。

「越生町社会福祉協議会」は、社会福祉の推進を目的とした住民主体の福祉団体です。在宅福祉サービスやボランティア活動の推進などを住民と共に行っています。

町民の37・2%が高齢者という今後の日本の縮図ともいえるような越生町では、健康・福祉・介護の充実を推進していきます。

あなたを支える越生町の健康・福祉・介護

認知症初期集中支援チームのみなさん

医療と介護の連携

自立した生活が長く維持できるよう保健・医療・福祉の専門職が、本人・家族の相談に親身になって対応しています。

健康づくりの推進

だれもが、健康でいきいきと暮らせることを目指し、各年齢層に応じた健康づくり対策を、地域やボランティアの方とともに積極的に展開しています。

越生町社会福祉協議会

生活の基本となる食確保事業の一環として町と社会福祉協議会で配食サービスを実施しています。

高齢者福祉の充実

地域包括ケア体制の深化・推進に努め、高齢者がいきいきと活動できる生きがいづくりを進めます。

障がい者福祉の充実

ノーマライゼーション[1]に対する理解が深まるよう、広報・啓発活動に努めます。また、共生社会の実現に向けて障がいのある方と、ない方が交流する機会を拡充します。

[1]障がいのある方や高齢者など社会的に不利を負いやすい人々がほかの人々と同じように生活し、活動する社会が本来あるべき姿であるという考え方。

のびのびと、あたたかく見守られて育つ

子育てと教育のまち

越生町は、恵まれた豊かな自然の中で、すべての子どもたちが健やかに育ち、安心して学べる「子育てと教育のまち」として、子育て支援と教育の充実に力を注いでいます。子育てに関する各家庭・学校・地域の連携を強化し、子どもの成長を応援していきます。

妊娠期からサポート

「子育て世代包括支援センター」では妊娠・出産・子育てに関する様々な相談に応じています。

妊娠・出産

- ウェルカム赤ちゃん事業
- 妊婦タクシー利用料金助成事業
- 赤ちゃん訪問（すべてのご家庭に保健師が訪問いたします）

子育て

- 出生祝金支給事業
- こどもの医療費18歳まで無料
- ベビーベッド無料貸出
- チャイルドシート購入費助成

子育て支援の充実

すべての子どもが健やかに育っていくことのできるまちを推進していきます。

小中一貫教育の取り組み

義務教育9年間を見通した一貫性のある教育を推進し、少人数指導、地域の特色を生かした小中連携教育などに取組み、子どもを町全体で応援します。

小学校・中学校

- 学校給食第3子以降半額助成
- 英語検定助成
- 各校常勤ALTの配置

学習環境の整備・充実

みどり豊かな自然環境と充実した学習環境のもと、一人一台パソコンを活用し、デジタル時代に強い人材を育てます。

移住＆Uターン わたしたちの生き方

世代を受け継ぐ、ものづくりを

山田建具店 三代目　山田 輝人さん

創業57年、無垢の木製建具を中心に製作する建具屋を営んでいます。「かつて越生では西川材と呼ばれる地場産材を活用した木工業が盛んで、そこに携わる会社は150社以上にも及んだ」と父は言います。今では建具屋さんも少なくなりましたが、祖父の時代から継承される建具づくりの技術や姿勢を受け継ぎたいという思いで、東京からUターンし、一から学びました。

完全受注生産の建具づくりは、素材やデザインも様々。オーダーに対して最適な作り方を考えていくことから始まり、仕上げのカンナを何回掛けるかまで、一つとして同じ例のない繊細な作業です。サイズの正確性はもちろん、木の艶や表情までこだわります。要望に応え、一切妥協せず、ちゃんとやる。これが祖父から教わったものづくりの姿勢です。

作り手として、これからの時代に向けて考えていることは、「捨てられない建具」づくりです。仕事中に、古い家から大正時代に作られた襖を見つけたことがありました。良い建具とは、長い年月を経ても狂うことなく、世代を超えて使えるものだと、そのとき確信しました。たとえ家が古くなり、リフォームをすることになっても、この建具は次の家でも使いたいなと思ってもらえるようなものを作りたい。できるだけ長く使ってもらえるように工夫したい。目指すのは、世代を受け継ぐものづくりです。

建具や家具の他に、地域で使用される木製看板を制作するなど町の景観づくりにも貢献しています。

地域の伝統芸能を楽しんでもらうために

画家
栗田 知佳さん

結婚を機に移住する前に、越生の民俗芸能であるお神楽に出会いました。20代や30代の方も活躍する、その勇ましい舞に感動し、絵にしました。民族衣装や伝統的な模様が好きで、学生時代から民俗芸能「江戸の里神楽」を題材に100枚以上の絵を描いてきました。移住後も活動を続けていて、地元神社の神楽のポスターを描いたり夏の越生まつりで展示をしたりしています。またお神楽のことを、皆さんに親しみやすくなってもらえるように、演目のお話をわかりやすくまとめた絵本を作って配っています。越生には立派な山車が曳き回される越生まつりや、各町内の獅子舞など、楽しめる伝統芸能がたくさんあるので、今後もそれを広めていきたいです。

地元神社で行われる江戸の里神楽の演目「紅葉狩り」の作品

東京から一番近い自然ある暮らしを求めて

東京で美容サロンと植物店を経営
石井 和昭さん

都内に仕事で通いながら、自然が豊かな場所に住みたいという思いから家族で移住しました。十分な広さの土地に家を建て、趣味であり仕事でもある植物のための温室を作ったり、畑作りにチャレンジしたりと、都内ではできなかった暮らしのカスタムを楽しんでいます。子どもたちは野遊びから多くを学び、季節で移ろう山の景色を気に入っています。近所の人に気軽に声をかけてもらい、子連れでバーベキューを楽しんだり、地域に自然と溶け込めていけたことが本当にありがたいことです。現在では消防団や学校のPTA、地域の行事にも積極的に関わっています。小さな町だからこそ、一緒にやろうという思いで支え合う、地域の輪がある町だと感じています。

大好きな植物のために温室を作った石井さん

町の魅力を多くの人に知ってもらいたい

オクムサ・マルシェ オーナー
浅見 敦さん

越生と関わる人が増えてくれたらという思いからその入口になる場所として「奥武蔵エリアの魅力的なものが集まる市場」というコンセプトでカフェを開業しました。店内では薬膳ごはんや特産品を使ったデザートなど、自然派で健康志向のお食事が楽しめます。都内からUターンした私は、五感で感じる町の魅力に改めて気づかされました。鳥のさえずりや、川の音。木々の香りに、梅やゆずの癒しの香り。この自然を感じる環境と体に優しい食事を通して、心身が健やかになれるような時間を提供できたらと思います。日々抱えている課題を一旦手放し、ゆっくりと時間を過ごす。町全体がそんなセラピーのような場所になれる可能性を感じています。

越生周辺の「知りたい」が集まる場所、オクムサ・マルシェ

季節を感じるイベントと花ごよみ

越生町にはたくさんのイベントがあります。
このページでは、町で毎年開催されるイベントと、四季折々の花々を紹介します。

	イベント	花ごよみ
4月	●さくら祭り(さくらの山公園) ●さくらの山公園ライトアップ(3～4月) ●五大尊つつじ祭り(4～5月) ●花の里おごせ健康づくりウォーキング大会	桜 ［場所］さくらの山公園、大観山、弘法山、学頭沼、虚空蔵尊さくら公園 三ツ葉つつじ ［場所］三ツ葉つつじ園 山吹 ［場所］山吹の里歴史公園、こんぴら山公園、龍ケ谷地内 つつじ ［場所］五大尊、正法寺、ニューサンピア埼玉おごせ
5月	●五大尊つつじ祭り(4～5月) ●世界無名戦士之墓慰霊大祭 ●子どもフェスティバル(中央公民館) ●子どもおはやし大会(視聴覚ホール)	
6月	●梅キャンペーン ●梅フェア(うめその梅の駅) ●あじさい街道祭り	あじさい ［場所］あじさい街道
7月	●黒山三滝　滝開き ●越生まつり	ゆり ［場所］山間地 さるすべり ［場所］黒山地内の県道沿い
8月	●マスつかみ取り大会 ●納涼ふれあい祭り(梅園コミュニティ館) ●黒山三滝ライトアップ	
9月		曼珠沙華 ［場所］さくらの山公園
10月	●八幡神社の獅子舞(津久根区) ●住吉神社の獅子舞(麦原区) ●里神楽(春日神社) ●梅園神社の獅子舞(小杉区)	
11月	●東山神社の獅子舞(上野区)	ゆず ［場所］黒山、龍ケ谷、麦原、上谷地内
12月	●ゆずフェア(うめその梅の駅) ●ゆずキャンペーン ●黒山・鎌北湖駅伝大会	
1月	●新春武蔵越生七福神めぐり	
2月	●越生梅林梅まつり(2～3月)	白梅 紅梅 ［場所］越生梅林とその周辺、梅園小学校周辺、医王寺周辺上野東地内 福寿草 ［場所］越生梅林内(福寿草園)、津久根周辺
3月	●越生梅林梅まつり(2～3月) ●虚空蔵尊だるま市 ●さくらの山公園ライトアップ(3～4月)	桜

ゆったりと、時間を忘れて

一緒に遊ぼう、これからもずっと

心ときめく、日常がある

見守ってくれて、ありがとう

いざ、黒山三滝の滝開きの儀へ

夏の思い出は、みんなで食べたかき氷

仲間と楽しく、地域づくり

みんな、大好き

土の恵みに、感謝

ごちそうさま！おいしかったよ

風土に根づく祈りのかたち

越生まつりの山車

本町　仲町　上町　新宿町　河原町　黒岩町

越生まつり

越生まつりの歴史は、江戸時代までさかのぼります。もとは旧越生村と黒岩村の八坂神社の祇園祭で、天王様の名で親しまれてきました。両八坂神社は高取山麓の琴平神社に合祀され、越生神社と社号を改め、現在に至っています。

まつり初日、越生神社から出立した神輿が町内を練り歩き、夕方から6町内の山車の曳き回しが始まります。山車の上では、江戸神田囃子の流れをくむ越生囃子が披露され、その軽妙なリズムに合わせて天狐、外道、ひょっとこなどが踊ります。

翌日も、曳き回しや山車と山車が向かい合って囃子の競演をする「曳っかわせ」が行われます。日が沈み、山車の提灯にあかりが灯されると、6基の山車が役場前の広場に勢揃いします。そして、まつりのクライマックスには大輪の花火が、夏の夜を華麗に演出します。

越生の獅子舞

越生の獅子舞は、津久根の八幡神社、麦原の住吉神社、小杉の梅園神社、上野の東山神社の町内4か所で行われています。豊作を感謝し、10月～11月にかけて奉納されます。

いずれも2頭の雄獅子（大獅子・中獅子）が1頭の雌獅子を奪い合うという筋立てで、芝居でいう幕にあたる「庭」が演じられます。

4つの獅子舞

梅園神社の獅子舞

東山神社の獅子舞

住吉神社の獅子舞

八幡神社の獅子舞

七福神のお寺

越生町には七福神をお祀りするお寺があります。新年に行われる七福神めぐりは「七難即滅七福即生」のご利益があるとされ、健康づくりと招福、長寿、蓄財を祈願して歩く全行程約13kmの自然豊かなハイキングコースです。

全てのお寺を回ると御朱印色紙が完成

弘法山 見正寺 観音堂　弁財天

子宝、安産祈願にお参りください。

副住職の平沼修さん

大慈山 正法寺　大黒天

秋にはモミジやイチョウが色づくのでぜひおいでください。

住職の岩田智道さん

松渓山 法恩寺　恵比寿

越生駅から徒歩1分のお寺です。樹齢100年以上の桜があります。

住職の安西研昌さん

青龍山 最勝寺　福禄寿

源頼朝にゆかりのあるお寺です。

住職の齋藤隆聖さん

大護山 円通寺　寿老人

皆さまの長寿をお祈りしております。

住職の内山晶文さん

長昌山 龍穏寺　毘沙門天

龍神伝説の残るパワースポットです。5月には自生したセッコクが見頃を迎えます。

椎葉紋弘和尚

岩松山 全洞院　布袋尊

渋沢平九郎のお墓が境内にあります。

住職の増尾貫道さん

春の訪れを祝う 越生梅林

春の訪れを知らせてくれる梅の花。早春の越生は道を歩いているだけで梅の香りが漂ってきます。春風に吹かれながら咲いている姿は、健気で美しく、私たちの心を励ましてくれているようです。

越生梅林

越生梅林は梅園神社向かいの越辺川岸に位置し、約2ヘクタールもの広大な面積を有する梅林として整備されています。「関東三大梅林」の一つに数えられ、「白加賀」「越生野梅」「べに梅」など様々な品種の梅の木が約1千本植えられています。

越生梅林の古木「魁雪（かいせつ）」

越生の梅は、南北朝時代の観応元年（1350）に九州太宰府から小杉天満宮（現梅園神社）に分祀した際、菅原道真公にちなんで梅を植えたのが起源であると伝えられています。越生梅林を象徴する梅の古木である「魁雪」は、その頃の梅（越生野梅）が現代まで生き長らえたものと推定されます。

人の世の栄枯を見つめ、670年を経て、なお可憐な花を咲かせ続ける名木です。

さくらの山公園

さくらの山公園にはソメイヨシノやシダレザクラ、ヤエザクラなどの桜が約300本植えられています。毎年3月下旬にはソメイヨシノが一斉に開花し、豪華絢爛な満開の花を楽しめます。

さくらの開花に合わせた土・日曜日にはさくら祭りが開催されます。提灯によるライトアップも行われ、幻想的な光景を楽しめます。

五大尊（ごだいそん）つつじ公園

五大尊つつじ公園には園内に10種類以上、約1万株のつつじが植栽されており、関東屈指のつつじの名所として、その名が広く知られています。

開花シーズンになると、色とりどりの鮮やかなつつじがより一層輝きを増し、その光景はまさに〝圧巻〟です。

天狗滝

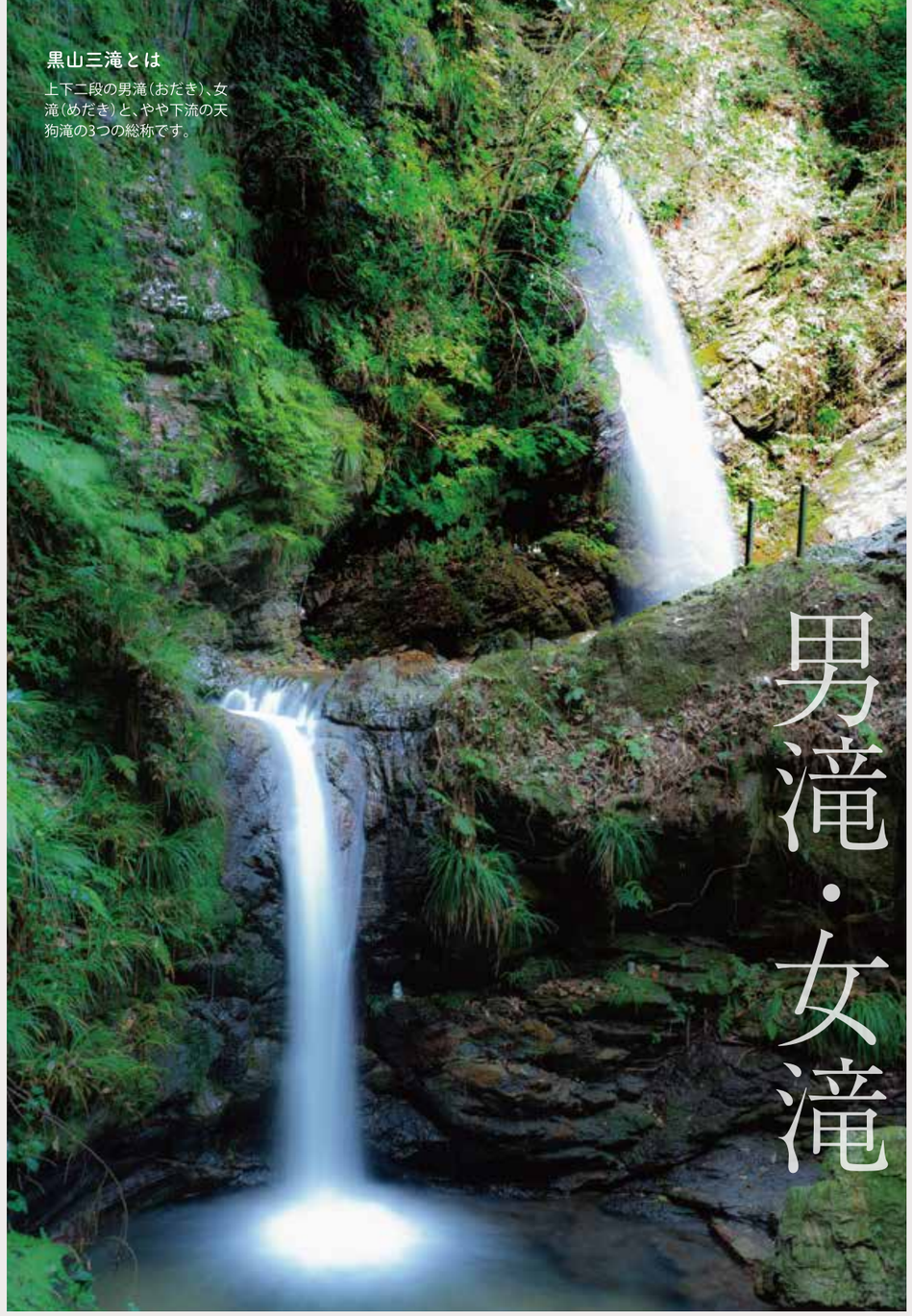
黒山三滝（くろやまさんたき）の歴史

黒山周辺は、室町時代に山岳宗教修験道の拠点として開かれ、黒山三滝は修験道場として広く信仰を集めました。幕末に越生町出身の尾張屋三平（おわりやさんぺい）によって江戸に紹介され、明治時代には多くの観光客が訪れる観光地として知られるようになりました。

昭和25年に新日本観光地百選瀑布の部において9位に選ばれた景勝地であり、翌年には黒山三滝を中心とする広い地域が県立黒山自然公園に認定されました。

「春は新緑・夏は清涼・秋は紅葉・冬は雪景色」と一年を通して様々な表情を見せ、訪れる人を飽きさせません。

毎年７月に行われる滝開きの儀



男滝・女滝

黒山三滝とは

上下二段の男滝（おだき）、女滝（めだき）と、やや下流の天狗滝の3つの総称です。

祈り継がれた、聖なる場

黒山三滝

日本では古くから、山岳を神霊が降り立つ聖地として崇めてきました。祈り継がれてきた黒山三滝の厳かな佇まいに私たちはパワーを授かり、祈りの心をつないでいきます。

大平山（おおひらさん）の役行者（えんのぎょうじゃ）像

山々を見守る、修験道の開祖

黒山三滝からほど近いところに、日本の山岳宗教である修験道の開祖として崇拝されてきた、役行者の巨大な石像が鎮座しています。役行者には数多くの伝説が残されており、人に災いをもたらしていた前鬼・後鬼を改心させ従わせたという伝承から、この石像も二匹の鬼を従えています。

「飛騨観光 陽山亭」猪鍋

四季折々の自然

ノスタルジックな雰囲気に浸る

多くの観光客で賑わう黒山三滝周辺では、様々なおもてなしの心が息づいています。なつかしのレトロなお土産屋、マスやイワナが釣れる釣り堀、合掌造りの店内で鹿や猪鍋などのジビエが楽しめるお食事処など。四季が織りなす山の魅力とともにゆっくり散策を楽しめます。

五感で歩く、ハイキングのまち

低山を中心とした山々に囲まれた越生町。
ハイキングのまちとして五感を解放する
アウトドア体験を発信しています。

上谷の大クス

樹齢1000年を超える埼玉県一の巨木

上谷(かみやつ)の山入(やまいり)集落に根を張る大クス（大楠）は、幹周り15m、高さ30mの巨木です。真夏のうだるような暑さでも、この大クスの木陰はひんやりと涼しく、自然の大切さを改めて実感させてくれます。

昭和63年度「緑の国勢調査」で、全国巨木ランキング第16位、埼玉県では第1位に認定されました。県の天然記念物に指定されています。

ハイキングの聖地として

越生町は、平成28年4月29日に全国で初めて「ハイキングのまち」宣言をしました。多種多様な見どころと、町が誇る色とりどりの花木。これらの環境を活かし、月ごとのおすすめコースを設定し、ハイキング大会も開催しています。里山ながらのアップダウンがしっかりとある登山道は、登山初心者から熟練者まで幅広く親しまれ、多くの人が訪れます。ハイキングによる観光の振興、地域の活性化、町民の健康づくりを推進し、町全体でハイカーへのおもてなしの心を醸成しています。

ハイカーに親しまれる足腰の神様
「子ノ権現（ねのごんげん）」

＼野山を歩けば、発見がいっぱい！／

右上／大高取山山頂からの眺め
左上／野末張見晴台
（のすばりみはらしだい）
左下／およそ1,500株の花が咲く
あじさい街道

自然と過ごす極上のひとときこれからの日本に大切なテーマは「自然との調和」。今、越生の宿泊施設では新しい自然との過ごし方を提案しています。

広い山を
キャンプエリアに

森の中に佇む
空中グランピング

ニューサンピア埼玉おごせ

日本初、おひとり様専用キャンプ場。
山の中で一人きりの優雅な時間

焚き火をしてゆらめく炎を眺める。お気に入りのアイテムで腹ごしらえ。自然に身を任せて寝て、日の出とともに起きる。

ソロキャンプ

ニューサンピア埼玉おごせでは、家族やグループで楽しめるオートキャンプ場のほか、20歳以上のお一人様だけが使えるソロキャンプ場エリアがあります。自然の中でたった一人、誰にも邪魔されずに過ごす、自分だけの自由な時間は格別です。

越生温泉 美白の湯『梅の湯』

薄い乳白色をした「美白の湯」の温質はph10.3の強アルカリ性。温泉成分が皮脂を溶かし、うるおいを与えるので美肌効果があります。入浴後の肌がすべすべに。キャンプの合間や日帰りの利用も可能です。

BIO-RESORT HOTEL & SPA
O Park OGOSE

ビオトープをテーマに、自然と調和する
豊富なグランピングスタイル

一棟貸しグランピング×サウナ

オーパークおごせは、広大な森林の中でグランピングやサウナ、キャンプ、各種アウトドア体験ができる複合リゾート施設。宿泊プランが充実しており、特に人気なのは、フィンランド式サウナを楽しめるサウナスイートキャビン。宿泊している間は24時間、いつでもプライベートサウナを満喫できます。

選べる7つの宿泊

空調や浴室の備わった過ごしやすい屋内キャビンから、本格的なグランピングテントまで、幅広い宿泊タイプがあります。BBQや、アウトドア初心者向けのアクティビティ体験も豊富です。

越生町のご当地キャラクター「うめりん」をモチーフにした宿泊施設「ドームキャビン」。

歴史を紡ぐ、文化に触れる

龍穏寺山門（町指定文化財）

曹洞宗長昌山 龍穏寺

草創は平安時代と伝えられ、永享2年（1430）に、室町幕府の第6代将軍足利義教が上杉持朝に命じ、無極慧徹を招いて復興したのが開基とされます。文明4年（1472）に太田道真・道灌父子が兵火に罹り荒廃していた伽藍を再建し、以後曹洞宗の大寺院に発展しました。

境内で一層目を引く山門は、一階には四天王を安置。高欄付きの縁が回る二階内部には、観音菩薩、十六羅漢が祀られています。

また、外壁に道元禅師一代記彫刻が施された経蔵の内部は壁画で飾られ、一切経を収納する八角形の輪蔵が設えてあります。

この他、歴代住職墓地には、道真・道灌父子の墓があります。

龍穏寺経蔵（県指定文化財）

太田道真・道灌の墓

大宮神社本殿（町指定文化財）

文武天皇元年（697）創建、承和3年（836）再営と伝えられています。文久3年（1863）再建の本殿の見事な彫刻は、熊谷の彫物師・小林斎熊山橘正信によるものです。町指定の「聖天像」が祀られています。

八幡神社本殿（町指定文化財）

神社に伝わる宝物の金剛盤に「正嘉2年」（1258）の銘があり、創建が鎌倉時代以前にまで遡ることを物語っています。

現在の社殿は天保5年（1834）に建立され、本殿を飾る豪奢な彫刻は、江戸浅草の彫物師・嶋村源蔵によるものです。

木造五大明王像（県指定文化財）

五大尊（五大明王像）は、黒岩区の五大尊本堂で、永らく秘仏として守り伝えられてきました。

五大尊とは不動・降三世・軍荼利・大威徳・金剛夜叉の五大明王の事で、大日如来の化身・使者として人々を教化する存在とされています。

そのおおらかで個性的な作風と誠実かつ純粋な彫技から、平安時代末期頃の地方仏師による作と考えられています。古代・中世にまで遡る、五体そろった明王像としては、県内唯一の存在です。現在は、埼玉県立歴史と民俗の博物館に寄託されています。

世界無名戦士之墓（国登録有形文化財）

大観山頂に建つ第二次世界大戦戦没者の納骨・慰霊廟です。昭和24年、埼玉県議会副議長を務めていた当町の医師・長谷部秀邦氏が発起人となって建設運動を始め、多くの人びとの浄財と奉仕作業によって昭和30年に落成しました。毎年5月には「世界無名戦士之墓慰霊大祭」が行われます。なお、国内には、このような施設は、昭和34年に建設された「千鳥ヶ淵戦没者墓苑」以外にはありません。

絹本着色釈迦三尊及阿難迦葉像（法恩寺蔵・国指定重要文化財）

中央に釈迦如来、その両側に阿難、迦葉、文殊菩薩、普賢菩薩を画いたもので、元の天暦3年（1330）の銘が入っています。「絹本着色高野・丹生明神像」とともに、国の重要文化財に指定されています。

木造如意輪観音半跏像（県指定文化財）

カヤ材の割矧造で、胎内に平安時代の応保2年（1162）の墨書銘がある関東最古の在銘像として、美術史上大変貴重な作品です。

「如意（ねおい）」という地名の由来ともいわれています。

越生の偉人

太田道灌（1432年～1486年）

道灌は、龍ヶ谷の山枝庵で誕生したと伝えられています。

道灌は鷹狩の途中、にわか雨に遭い、蓑を借りに、とある貧しい民家を訪ねます。出てきた少女が一枝の山吹を差し出しました。この謎掛けが解けなかった道灌は、「七重八重花は咲けども山吹の実の一つだになきぞ悲しき」という古歌を教えられ、「蓑がない」悲しさを山吹に託した少女の想いを知りました。己の不明を恥じた道灌は、歌道を志し、文武両道の名将になった」という有名な逸話の故地です。

渋沢平九郎（1847年～1868年）

渋沢(尾高)平九郎は、弘化4年(1847)、武蔵国榛沢郡下手計村（現深谷市）に生まれました。長兄惇忠と次兄長七郎、いとこの渋沢成一郎や渋沢栄一らと学問や文芸、剣術に親しみ、彼らの影響を受けて育ちました。

慶応3年（1867）、渡欧する栄一の養子となった平九郎は、幕臣として徳川家復権を図るべく、彰義隊・振武軍に参加しますが、飯能戦争で新政府に敗れ、越生の地で短い生涯を終えました。

これまでの越生町を振り返る

越生町は明治22年に誕生しました。時代とともに発展を遂げ、現在に至るまでに
先人たちの"おごせ"のまちへの様々な想いや、築きあげてきた歴史があります。
今日までの約100年間の主な出来事を、ここで紹介します。

1889〔明治22年〕
■町村制施行により越生町と梅園村が誕生

1907〔明治40年〕
■越生町役場庁舎完成

1922〔大正11年〕
■上谷の大クスが県指定文化財(天然記念物)に指定される

1940〔昭和15年〕
■越生梅林が県指定文化財(名勝)に指定される

1947〔昭和22年〕
■越生中学校、梅園中学校を開設

1955〔昭和30年〕
■世界無名戦士之墓落成

1955〔昭和30年〕
■越生町・梅園村合併

1957〔昭和32年〕
■越生町観光協会創設

1960〔昭和35年〕
■広報おごせ発行
■越生町商工会創設

1968〔昭和43年〕
■越生町役場新庁舎完成

1970〔昭和45年〕
■越生中学校新校舎開校

1973〔昭和48年〕
■町章制定

1976〔昭和51年〕
■越生自然休養村センター完成

1983〔昭和58年〕
■七福神めぐり開始

■中央公民館、体育館完成

1985〔昭和60年〕
■町立図書館完成

1989〔平成元年〕
■町民憲章を制定

1989〔平成元年〕
■第1回越生まつり開催
■越生町観光案内所「オーティック」オープン
■越生特産物加工研究所「元気百梅」販売開始

1990〔平成2年〕
■やまぶき公民館開館
■第1回子どもおはやし大会開催
■越生町地域づくり推進協議会創立

1992〔平成4年〕
■さくらの山公園開園
■健康づくりのまち宣言

1994〔平成6年〕
■役場庁舎の増築工事完了

1995〔平成7年〕
■ゆうパークおごせ(現:オーパークおごせ)オープン

■第1回あじさいまつり開催

1999〔平成11年〕
■第1回武蔵おごせウオーキング大会開催

2000〔平成12年〕
■第5回全国梅サミット協議会越生大会開催

2002〔平成14年〕
■中央公民館分館(ゆうがく館)オープン

■越生梅林に見晴展望台と橋を整備

見晴展望台

2003〔平成15年〕
■越生町地域交流センターオープン

2004〔平成16年〕
■第1回ゆずフェア開催

■山吹大橋開通

2005〔平成17年〕
■役場土曜開庁開始
■野末張見晴台完成

■第1回梅フェア開催

2005〔平成17年〕
■越生中学校の教室棟改修

■越生町子育て支援センター事業開始

2006〔平成18年〕
■川越ナンバー誕生
■梅オーナー制度開始
■第1回龍ケ谷ヤマザクラハイキング大会開催

■越生山吹の里道灌まつり開催

2007〔平成19年〕
■越生町地域包括支援センター開設

2008〔平成20年〕
■越生町観光センター「里の駅・おごせ」オープン

2009〔平成21年〕
■越生町消防支援隊発足

2010〔平成22年〕
■第1回越生うめ・ゆず料理レシピコンテスト開催
■越生特産物加工研究所「ゆず之介」販売開始

■越生町のマスコット「うめりん」誕生

2011〔平成23年〕
■「越生神社神輿」3基を町指定文化財に指定

2014〔平成26年〕
■越生駅前にハイキングの拠点となるポケットパークを整備

2019〔令和元年〕
■「越生べに梅」のロゴマークを商標登録

■越生駅東口開設

2020〔令和2年〕
■「道灌おもてなしプラザ」完成

■西口駅前ロータリーに「太田道灌像」を設置。

越生町のまちづくり

三浦道弘副町長　新井康之町長　原口仁教育長

越生町議会議員

安心元気な越生町を目指します

越生町は、「町民と行政との協働により将来を創造するまちづくり」、「自然と文化を愛でやさしさと思いやりのあるまちづくり」、「地域の特性を活かした活力と魅力のあるまちづくり」の3つを基本理念とし、今後のまちづくりを総合的かつ計画的に進めていきます。

町民の意見を行政に反映させ開かれた議会運営を目指します

越生町議会は、町民の代表である定員11人の町議会議員で構成されています。年間を通じ4回の定例会と必要に応じて開催される臨時会では、町全体の取り組み方針や課題解決について活発な議論が展開されています。行政のチェック機関として開かれた議会運営を目指します。

みどりとせせらぎのまち 越生

～笑顔と活気に満ち 夢が広がるまちづくり～

町民と行政との協働により将来を創造するまちづくり

本町のまちづくりは、行政主体ではなく町民自らが考え実行しようとする気運が高まっています。行政は、地域の意見や町民の声を聞くとともに、情報公開を積極的に行うことにより、町民との相互理解によるまちづくりを進めていくことが必要です。

小さな町だからこそ、町民、事業所、各種団体、行政が共通の課題と目標を持ち、それを解決していくために、町民と行政が一体となって、将来を見据えた魅力溢れるまちづくりを創造します。

自然と文化を愛で やさしさと思いやりのあるまちづくり

本町の自然環境は、奥武蔵の里山の風情が息づいています。四季折々の花、梅・ゆず香る豊かな恵み、家族で楽しむレジャーなど癒しの要素を備え、歴史と文化が相まって、人の心を豊かにしてきました。

この自然と文化に抱かれたなかで、健康づくりが実践できる、安心して子育てができる、ハイキングやスポーツを楽しむことができるなど、だれもが健康・医療・福祉を享受できるやさしさと思いやりのあるまちづくりを推進します。

地域の特性を活かした 活力と魅力のあるまちづくり

本町は、首都50㎞圏にあり、高速道路や鉄道路線により東京まで約1時間と交通利便性に恵まれ、調和のとれた豊かな環境のなかにあります。

この恵まれた地域特性を活かし、農林業と商工業をバランス良く振興することにより、調和のとれた土地利用を図るとともに、人々が行き交い、ふれあい、安心して暮らせる住環境を整備し、新たな交流が生まれる活気のある持続可能なまちづくりを推進します。

ともに創るまち
（女性・若者まちづくり会議）

安心して暮らせるまち
（見守りボランティア）

新たなつながりが生まれるまち
（子どもフェスティバル）

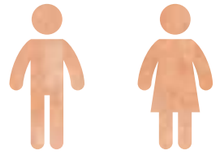
数字でみる越生町（令和4年1月1日現在）

面積

世帯数

5,084世帯

人口 11,248人



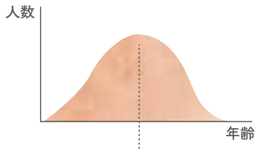
男性 5,610人　女性 5,638人

町民一人当たりに使われる金額

361,732円

令和3年度 一般会計当初予算

平均年齢



52歳

高齢者の割合

37.2%

空き家バンク

県内成約数 第1位

令和3年度末時点埼玉県市町村別通算成約件数（連携団体を除く）

越生町の梅の木

約2万本

自動車所有率

73.2%

令和3年3月31日現在

町の7割が山地

令和4年1月1日現在

越生町の木・花・鳥

町章

みどりと山と川の流れを「生」の文字で表現し、「越」を両手で抱き上げ町民の友愛と明日への町の発展を考慮して図案しました。

町の名前の由来

越生は難読地名の代表格です。その語源については諸説ありますが、平野と山地の接点にあたる越生からは、秩父に向かうにも、上洲に向かうにも尾根や峠を越えなければなりません。それに由来した『尾根越し（おねごし）』の『尾越し（おごし）』という言葉から変化したという説が有力視されています。

あなたとつながる、越生町

Access

お車で

- 関越自動車道 鶴ヶ島ICから約20分
  坂戸西スマートICから約15分
- 圏央道 狭山日高ICから約25分

電車で

東武東上線「池袋駅」から約65分
JR八高線「八王子駅」から約65分

埼玉県の外秩父山地のふもと、中山間地域に越生町はあります。
みどり豊かな里山の風土と、そこに調和するように生きる人々が育んできた
多様な魅力にぜひ触れてください。よい出会いがありますように。

OGOSE STORY

発　　行：越生町
発行年月日：令和4年(2022)3月
編　　集：越生町役場 総務課
〒350-0494 埼玉県入間郡越生町越生900-2
電　　話：049-292-3121
メ　ー　ル：webmaster@town.ogose.saitama.jp
U　R　L：http://www.town.ogose.saitama.jp/
制　　作：コミニカ企画株式会社
編集/デザイン協力：越生町地域おこし協力隊